

愛の言葉

まなぶおじさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

紗希が携帯を操作し、ぐい、と画面を見せつける。

九月 大洗学園文化祭開催予定

言葉が出ない――

もしかして、もしかして、

「文化祭の、ライブに出ろって……？」

紗希は頷く。

後編 前編

目

次

19 1

前編

放課後の光が射せば、生徒達は一斉に生き返る。それを祝福するよう、雲を装飾とした

清々しい青空の下で、緑川はシケたため息をついていた。

憩いの場として設けられた公園のベンチで、緑川はギターをてきぱきと弾いている。ジャンルはジャズで、腕前は「注意深く聴かないと外したかどうかは分からぬ」程度。

生徒の身分であるから、別に金に困つて演奏しているわけではない。単に友達がいないから、

暇すぎて楽器で遊んでいるだけだ。

演奏している間は、熱中もするし完遂させようともする。時には人が寄ってきて拍手をくれる

こともあるし、お金を差し出してくれることがあるが、全て断つている。

そういう時は、人並みに達成感は得られる。ただ演奏の世界から抜けきると、灰色の青春を

送っている現実を否応なく実感してしまうのだ。

全部、自分が悪いんだけどね――

苦笑しながらぶつくさ呟いた後は、再びギターの世界へ戻る為に、指を弦に置く。

ジャズの名曲を弾き、苦手なパートに多少失敗しながらも、緑川は感慨深そうな表情で音に身を委ねている。

この時間が続けばいいのに。

この時間は長続きはしない。

生きてきて十五年になる。人生経験が浅いことは百も承知だが、自分は大洗学園艦で一番の

不幸者だなあと思つてている矢先、

視線を感じる。

ギターからちらりと顔を向けてみれば、飾らないショートヘアをした、無表情のまま緑川を

見つめている女の子がいた。

指を動かしながら、音楽に対する思考を多少妥協させる。

制服は大洗女子学園のものだ。ジャズが好きそうなオヤジや、親子連れが聴きに入ることはあつたが、まさか学生が、それも異性が近づいてくるとは驚きだつた。

これは失敗出来ないと、カツコつけた表情になりながら演奏に集中する。何度も演奏した曲で良かつたと、つくづく思う。

——そして、演奏が終わる。

それと同時に、決して大袈裟ではない拍手が空気を震わす。改めて女の子に目を向けてみれば、くすりと笑っていた。

「あ、ありがとう……」

女の子はこくりと頷き、がま口の財布を取り出しては百円玉を差し出そうとする。

緑川は「あ、いいよいよ」と手で制する。

「その、単に趣味で弾いているだけ、だし……」

異性と話すことは久々であるし、しばらく口クに対話してもいなから、一言一言口にするのにいちいち頭が回る。

「あ、うん」

それだけで、沈黙が訪れる。

空はのんきなもので、雲は大変だねえとばかりに緑川を見下ろし、太陽はそんなこと知るかと

ばかりにギラギラと輝いている。

周囲では子供が遊具で遊んでいたり、母らしい女性がそれを見守っている。多少の演奏が

入つても、ここは公園だし、ということで流されることが多い。だが、目の前の少女は未だに緑川をじいつと見つめたままだ。

普通なら、一曲弾き終えれば、観客はあてもなく去っていくというのに。

「あ……えと……」

ひと呼吸つく。

「もう一曲、聴く？」

よく言えたものだと思う。

女の子は、うん、と頷く。

次も、慣れた名曲で演奏する。その間も女の子は緑川の真正面に立っていたし、何の言葉も

発することなく音を聴いてくれていた。

観客がいると、多少ながら体が強張る。しかし嫌というわけではない、むしろ失敗出来ない、

良い音を聴かせたい、という気持ちが先行して、いつも以上に一生懸命に、心を込めて曲を

届けることが出来る。

一人での演奏は基本ではあるが、失敗しても「まあいいや」で済ませてしまうことも多いから。

——そして、演奏が終わる。多少の間を置いたところで、現実に戻った自分のことを、女の子は拍手で迎えてくれた。

「ありがとう……え、えっと、その……」

女の子は、にこりと笑つたままでその場を動かない。

「自分の演奏、どう思う、かな？」

語りすぎず、伝えたいことだけを伝える。

女の子は、うん、と頷いてくれた。言葉は無いが、なんとなく意図が分かつた気がする。

「あ、ありがとう……あと一曲、いいかな？」

うん、と頷く。

学校という学生の戦場を今日も孤独に生き抜き、緑川はギターを片手に公園のベンチの一つを占領する。

中学三年までは普通に遊んでたんだけどなあ。

まあいいやと、身も指も心もギターに託す。今日は曇り空だが、雨さえ降つていなければ毎日が演奏日和だ。

唯一の趣味にして、自分の全てであるジャズに心を捧げる。それが

日課であり、心の支えで

あり、譲れない生き方だつた。

何度も弾き、飽きない名曲を演奏し終える頃に、何かの存在感が緑川の頭につんとくる。

ちらりと視線を傾けてみれば、先日、緑川の演奏を三度も聴いてくれた女の子が居た。

はつとなるが、緑川は演奏に集中し直す。「見知った女の子が自分の演奏をまた聴いてくれて

いる」という事実に、緑川はひどく動搖していた。

慣れていない曲を奏でていれば、絶対に数か所ほど失敗していただけである。

——そうして、演奏が終了する。そのたびに女の子は、控えめに拍手をくれるのだ。

「また、来てくれたんだね……」

こくりと、女の子は頷く。

「あ、えーっと、その、」

質問してしまっても良いのだろうか、と思う。

だが、「四度も自分の曲を聴いてくれているんだから、別に関心を持つても良いだろ」という、あくまで冷静な理性が緑川の本能を後押しする。

「え、えと、君は、」

女の子はくすりと笑ったままで、表情を変えない。

「えつと、大洗女子学園、かな？ そこの生徒かな？」

緊張むき出しの緑川に対し、女の子はあっさりと頷いた。

質問し終えて、馬鹿か自分は、と多少後悔する。女の子が着ている服は何だ。制服という

もので、何処の出身校かを証明する学生の基本装備だろうが。

「えーっと……何年、かな？」

女の子が、人差し指を立てる。

多少「？」と首をかしげたが、緑川は「ああ」と声を出し、

「一、一年か。僕と同じなんだね」

緑川も制服を着たままで、毎日ギターを演奏する。単に着替えるのが面倒くさいというのもあるし、デザインは好きな部類に入る。

「それにしても——君はどうして、ここに？」

そこで、緑川が「あ」と声を出す。このままでは、女の子がベンチに座れない空気のままでは

ないか。

「ど、どうぞ」

ベンチの端に移動し、座つていいよと手で促す。女の子はこくりと首を動かしながら、緑川の隣に腰を下ろす。

そして、先ほどの質問に応える為か、女の子が緑川のギターを指さす。

「えつと……つまり、僕の演奏を聴くために？」

遠慮なく、女の子が同意するように首を縦に振った。

瞬間、緑川は高校時代最大の興奮に染まる。あくまで冷静に解釈してみれば、同じ年の女の子が緑川のリピーターになつた、ファンになつてくれた、ということだ。

「ジャズ、好きなの？」

女の子は頷きもしないし首を横にも振るわない。普通、なのだろう。

「じゃあ……えつと、つまり、」

これから、自惚れていることを抜かす——そうやつてわかっているフリをすることで、緑川の心にバリアを張る。

「僕の演奏が、好き、なのかな？」

女の子は、首を縦に振った。

緑川は吊り橋を渡るレベルで慎重に話すし、何か口にした後で語りすぎていなか、鬱陶しくは無かつたかと、他人の感情が気になつて仕方がない性分である。

だが、心はあくまで、青春に片足を突つ込んだ十五歳児だった。何

はともあれ女の子から

「好き」と評されれば、男など「やつたぜ——ツ!!」と舞い上がる
のが当然なのだ。

はやる動搖を呼吸で何とかして、崩れそうになる表情を手のひらで
どうにかしながら、緑川は

あくまで冷静に、観客と会話を続ける。

「あ、ありがとう……すごく嬉しいよ」

すごくどころではなく、死んだくらい嬉しい。

「放課後は、いつもここにいるから、よかつたら、その、」
女の子は、こくりと頷いた。

やつた。

「あ、ありがとうございます。あ、えっと、良かつたら、その」
聞け。

女の子は「これからもここに来る」と証明したんだぞ。
素性について質問するぐらい、別に怪しくも押しつけがましくも無
いだろう。緑川は、

良いんだよな良いんだよなと心の中で連呼する。

「な、名前を、教えてくれるかな?」

あ、とばかりに女の子が表情を変える。そして鞄から取り出した
のは生徒手帳であり、緑川の目と鼻の先で手帳をぱかっと開く。
丸山紗希。

それが、女の子の名前だった。

それからというもの、紗希へ音楽を届けていく日々が続いた。
時々別の観客が近づいてくるものの、やはり一曲を弾き終えるか、
その途中で姿を消していく。

紗希は緑川の真正面に突っ立ちながら、二、三曲ほどじいっと聴く。
全て弾き終えたと態度で

示せば、吸い込まれるように緑川の隣に腰を下ろす。

「普段、丸山さんは何を、しているのかな?」

しゃべりすぎないように、熱くなりすぎないように。緑川はあくま

で、丁寧に言葉を探る。

紗希が携帯を取り出し、その画面には女の子達と戦車が映り込んでいた。

「あ、ああ……戦車道、だよね？　なるほど、そうなんだ」
耳にしたことはあるし、テレビなどで何度も見たことがある。
丸山は小柄で、語らざの穏やかさがあるが、戦車という「強い」乗り物に搭乗しているらしい。

凄い、と思う。自分には一生真似できない、と思う。

「戦車道、か。うん、なるほど……すごいね」

知識が無いので、どうしても簡単な感想しか出てこない。

しかし紗希は、口元を軽く緩ませながら、うん、と頷く。

「この人たちは……友達、かな？」

紗希を含め、戦車をバックに六人の女の子が映り込んでいる。この疑問に対しても、紗希は頷く。

「友達と一緒にいいね。うん、いい」

友達。

その言葉を口にして、思わずまことに表情を歪ませてしまった――

紗希は察しが良いのか、

困ったように眉をへこませている。

「あ、ごめんごめん。気にしないでね？　ねつ？」

全く冷静じやない口ぶりのまま、なんでもなかつた、を強調する。
しかし、紗希の目は緑川を射抜いた今まで、決して揺らぎはしない。
友達の事を話さなければいけないのでなく、友達について話してもいいよ。それが紗希から伝わる確かな意志であり、人柄だった。

「……つまんない話になるけど、ごめんね」

紗希は、小さく首を左右に振るう。

話してまだ数回程度だが、紗希の前では言葉が告ぎやすい。これは俗にいう聞き上手のことと、他人の話を決して拒絶しないという安心感が、紗希から柔らかく伝わってくる。

自主性をくすぐるそのキャラクターは、臆病な緑川をして、「話して

みようかな」とか「これを話したい」と、興味を誘うのだった。

「僕はね、そうだね。ジャズがとにかく好きでね。オヤジのレコードの影響、かもしない。

まあ、好きなんだ」

ギターを見つめる。

「それで、ギターも弾きたくなつて、ね。中学の頃になつてようやく買つてもらえて、すごく練習したんだ」

まだ数年も経過していないから、買つてもらつた時の場面が鮮明に思い出せる。

あの時が、生きてきて一番嬉しかった出来事だ。

「それで……音楽の授業が始まる前にね、音楽室にあつたギターを借りて、演奏してみたんだ。

そしたらクラスメートが、かつこいって褒めてくれた

うん、と紗希が反応する。

「それで、新しい友達が出来た。そこまでは良かつたんだけど――」

口ごもる。

女の子相手に、男の失敗談を聞かせるというのは、男らしくありたいという思春期男子に

とつてはめちゃくちや恥ずかしい所業だつた。

頭の中はどうしようかとぶつくさ言いつつ、紗希の表情を覗う。

紗希は何も語らない。しかし手振りや目で、意志を明確に伝えてくる。知りたいことは教えてくれたし、何に対しても疑問を抱いていたのも分かりやすかつた。

今の紗希は――緑川の大事な話を聞き届けたい。それを証明するのが、決して緑川から目をそらさない紗希の姿だった。

「……うん。僕はね、舞い上がつちゃつたんだね。同級生はジャズに興味があつたんじやなくて、楽器を弾けることに感心していただけて

――

息を吸う、吐く。

「普通の話もしたし、一緒に飲み食いだつてした。けど、口を開けば大

抵はジャズのことばかり

話して、この曲がいいとか、あの曲が初心者向けだよ、とか」

一度話せばもう止まらない。しかし、紗希は緑川から目を逃さない。

「あるジャズバンドが大洗学園艦に来てくれるって聞いて、僕は大急ぎでチケットを数枚分

購入した。友達と、一緒に聴きに行きたかったから」

場面の一つ一つが具体的に思い起こされる。それらは決してホコリなど被つてはいなくて、新品同様きらきらと光っている。

当たり前だ。

教室で、公園で、自分の部屋で、何度も思い返してもいれば、過去は決して風化しない。

「その時に気づくべき、だつたんだ。友人は、『ごめん、用事があるんだ』つてやんわりと

断つてさ……」

ギターをぐつと抱く。

「それで、中学三年になつた。相変わらず音楽室でギターを披露してたんだけれど、前みたく、

熱心に聴いてくれるつてことはなくて、」

何度も思うが、友人たちはしつかりと「警告」してくれていた。そのことを考へるたびに、

深いいため息が出る。

「……それでね、中学時代最後の文化祭が近くなつてね。僕は、言つたんだ。『ジャズバンドを

組んで、一緒に演奏しよう』つて。当然、友人たちからは、楽器の演奏なんか出来ないって

言われてね。

けど僕は、一人で勝手に盛り上がり、大丈夫大丈夫、出来るよつて言つたんだ」

胸が苦しくなる。タイムマシンがあるなら是非ともそれにすがりつきたいと、今でも思う。

怖いものなど何も無くて、中学時代最後というワードが緑川の野望に火をつけて、緑川は

友達という結束を根拠に、快くバンドを組んでくれると信じ込んでいた。

が、

「そうしたら、友達はうんざりした顔になつてね……『お前、自分の趣味を押し付けすぎだよ』

つて。他の友達もそれに同意してね。それで、こう言われたんだ」

今も、そしてこれから先も心に残るであろう言葉。

「『お前と話してると、凄く疲れる』つて」

話し終える。

生まれて初めて、恐ろしいものが誕生した瞬間だった。

この場をもつて、緑川の前向きな価値観は自主的に封印され、謙虚に、臆病に、孤独に、けれどジャズだけは手放すまいと生きるようになつた。

「……まあ、それきり疎遠になつちやつて、ね。僕は相変わらずジャズが好きだつたから、

話しかけるとまたジャズの事を話してしまいそうで」「

こん、とギターを叩く。

「だから、今の僕には友人がいない。当然だよね、ジャズのことばっかり話しかけられちゃ

うんざりするもんね、うん……」

納得するように、緑川は頷く。

「友人たちは何も悪くない、普通に警告しただけ。僕がびびりすぎて、自分から友達を

手放してしまつた」

無理に笑う。

「ごめんね。辛氣臭い話で——あ、ありがとう、話を聞いてくれて。嬉しいな」

明日から来なくなつても仕方がないと思う。こんな勝手な奴の演奏なんて、誰が

聴くものだろう。

作品の出来合いと人間性は関係無いというが、緑川は、紗希と目を合わせながら過ちを

口にしたのだ。ダイレクト過ぎて逃げ場がない。

けれど、紗希は決して緑川から目を逸らさなかつた。ジャズさえあればそれでいい、という

楽な道に逃してはくれなかつた。

「あ、えつと……ごめん、こんな奴で。その、」

紗希は、首を横に振つた。

「すき」

紗希は緑川を見つめ、ギターに視線を傾けて、また緑川を見据える。伝わる。

緑川の過ちを聞いても、緑川の人間性が、緑川の弾く音楽が、ジャズのことが、紗希は、全てが好きだと言つてくれた。

涙は出なかつたと思う。

「……ありがとう、丸山さん……」

紗希は、にこりと笑う。

すごく気分が良かつた。

それなのに、以前のような舞い上がりはない。どこか冷静さがあるあたり、自分も経験から

学べる程度の知能があつたらしい。

気付ければもう夕暮れだ。

公園から人気は失せ、建物の窓からは光が射す。この場で演奏すれば、とても気分が良いだろうなと思う。

隣を見る。

紗希はまだ、そこにいる。夕日に照らされている紗希は、相変わらずどこか読めない雰囲気のままで、けれども機嫌が良さそうに微笑している。

それを見て、ひとかけらの勇気が沸く。それでも前に出すぎないよ

うに、紗希のことを考えて、あくまで紗希の返答を優先にして。

「ねえ、丸山さん」

紗希がまたばきをする。

「その、良かつたら……時間があつたら、自作の曲、聴いてくれないかな。もともと、

中学の文化祭の時に練つてた奴なんだけど……」

紗希の目が、潤んだ気がする。

紗希は、うん、と首を振つた。

山郷あゆみは、つかれたーの一言で放課後を歓迎する。

授業中では何とか保たれていた静肅さはあっさりと破られ、元気の有り余る高校一年生たちは早速とばかりに教室から脱出したり、グループ内で予定を組んだりしている。

あゆみの友人達も、席で背筋を伸ばしているあゆみめがけ、小走りしたり歩いたりで集合する。

「あゆみー、今日はどこ寄るー？」

「昨日もジャンクフード食べにいったでしょお……お金あるの？」

「あるある」

阪口桂利奈が元気いいっぱいの表情で答えるが、半分ほどは信じていない。先週はアニメのDVDを購入していたはずだ。

「ということは、今日はさつと帰っちゃうの？」

「かもね……」

宇津木優季は温厚な友人であるが、それ故に機嫌が顔によく出てくる。明らかに不服そうに表情を曇らせるものだから、何だか悪者になつた気分だ。

「凄く疲てるね、あゆみ……ああ、そうか。最近、紗希に英語を教えてるもんね」

まとめ役の澤梓は、しつかりと他人をよく見てくれるタイプなので、こういう場面で助けられることも多い。

そう――

ここ最近になつて、丸山紗希が英語を教えてくれとばかりに、英語の教科書を手渡してきた。

最初は赤点対策かと思つたが、紗希は普通に点を稼ぐ方だ。

何かと思つて質問してみたが、それきり紗希は情報をシャットアウトしてしまつた。こうなつた紗希は諜報に対し無敵と化し、友人ですら紗希のことを探れなくなる。

「だよねー、なんだろうねー。あ、もしかして海外留学目指してるとか？」

大野あやが、冗談めかして言う。

最初は「テキトーなこと言つてるなあ」と思つたが、丸山紗希のことになると、案外否定はしきれない。

何せ自己主張はしないから、新しい事を始めても「そういうのが好きなんだ」と解釈出来るし、どんな夢があつても「そんなんだ……」と、意外に受け入れられる。

思えば、紗希と付き合うようになつた時期が思い出せない。いつのまにかそこにいて、気づけば当たり前のように話に混ざつていて、思うとグループ内でかかせない人物となつていた。

このようにまるで読めない人物であつたから、「英語を教えて欲しい」と教科書で

主張してきた時は、結構びっくりした記憶がある。

動機は不明なあたり、やはり紗希は紗希なのだろうとあゆみはまとめた。

「ねえ紗希、海外へ留学するの——」

あやがグループ内を見渡しても、紗希の姿は何処にもない。釣られるように友人達も教室全体を覗うが、まるで風のように消えてしまつていた。

そこにいたはずなのに——いや、居なかつたのかもしれない。

紗希は居て欲しい時にいて、いろんな話題を受け入れては肯定してくれる。その紗希がいない今、何だかぽつかりとした気分になつて、「……今日は、帰ろうか？」

桂利奈が「うん」と頷き、
「かえろう」

ギターとともに、公園のベンチへ歩み寄つてみれば、紗希がぽつんと存在していた。

見間違えかと思つたが、「あの」紗希の顔を忘れるはずがなく、緑川は「や、やあ」と

挨拶をする。先ほどまで上の空だつた紗希は、くるりと緑川に視線を向け、こくりと会釈した。

「今日は、早いね」

指定席と化したベンチへ腰を下ろし、早速とばかりにギターを傾ける。ギターをこんこんと

叩き、弦に指を乗せたところ、

緑川の視界に、メモ用紙が乱入した。内心ビビリながら前を向いてみれば、紗希がメモ用紙を

緑川へ差し渡している。

「えっと、これ……」

恐る恐るメモを受け取る。

最初、緑川は「何だこれ？」と声に出してしまつた——というのも、メモ用紙には日本語ではなく、英語が書かれていたからである。

よくよく見ると、英文の羅列の下には日本語が書かれていた。

「これは……詩？ ポエム……」

ちよつと待て。

これはひよつとして――

「……歌詞？」

こくりと、紗希は頷いた。

「これは、日本語訳なんだね。で、これは何の歌詞なの？」

全くもつて邪念が感じられない無表情のまま、紗希は緑川のギターを指さした。

「……あ、ああ！ もしかして？」

思わずデカい声が出る。他でもない緑川のギターを指定した理由は、

「僕の、自作の曲の歌詞！」

めちゃくちや明るい声が出た。紗希も、口元を緩ませながら頷く。「あ、ありがとう……すごく嬉しいよ。け、けれど、いきなりどうして紗希が携帯を操作し、ぐい、と画面を見せつける。

九月 大洗学園文化祭開催予定

言葉が出ない――

もしかして、もしかして、

「文化祭の、ライブに出るって……？」

紗希は頷く。

「そ、そんな……僕には、メンバー、どころか親しい人はいないし、」緑川が、恥ずかしそうにうつむく。どうしようかなあと思考を巡らせようとして、

ぽんぽんと、緑川の肩が叩かれる。

「え……」

紗希の人差し指が、にこりと微笑んでいる紗希の顔を差していた。

文化祭へ向けての練習は数日に渡つて続き、公園にはギターの音色とともに歌声が混ざるようになった。

緑川はこれまで以上に感情的にジャズを奏で、紗希は歌を伝える為に唄う。初めてそれを聴いた時は、「こんな声が出せるんだ」と、稻妻が走つたような衝撃に襲われた。

――緑川は、自分の演奏技術を省みたり、考察するようになつた。紗希も歌には慣れていない

らしく、失敗することもあつた。

それでも、その何もかもが楽しかった。九月が待ち遠しくて、文化祭が怖くなつて、目の前には丸山紗希がいてくれて。

これが欲しかつた時間なんだ、と実感した。もう一度と間違えはない、と心に刻んだ。

しかし、人生とは何が起こるかわからないものだつた。

今度は緑川の預かり知らぬところで、大洗学園艦の廃艦が決定したことだ。それを免れる為には、現在開催されている戦車道の全国大会で優勝しなければならないらしい。

マジかよとベンチで頭を抱えていたところ、紗希は居てくれた。そして、紗希は主張しない笑みを浮かせたままで、弦に乗せた緑川の手を撫でてくれたのだ。

ああ――

運命を背負っている紗希の方がつらいはずなのに、強い緊張状態に陥っているはずなのに、何を決めつけて落ち込んでいるのか。僕たつて男だろう、女の子を守りたい思春期野郎だろう。

「丸山さん」

紗希がまばたきをする。

「ありがとう――僕は信じてる。大洗のチームが、丸山さんが、必ず大洗を救ってくれるって、

勝利するって」

ギターを持ち直す。

「今から、一曲弾くよ。追い詰められても、知恵と信念と善はあなたを見捨てはしない――そんな曲を」

紗希は、こくりと頷き、

いつものように、曲を聴いてくれた。

そして、紗希は姿を消した。文化祭を、大洗を守る為に。

大洗女子学園は次々と勝利を重ね、いつの間にか決勝戦当日が訪れる。

戦車道には疎い緑川でも、黒森峰女学園が強豪だという話はニュースなどで耳にしている。

実際、緑川のクラスメートも「勝てるのかよ……」と半ば諦めかけていた。

それでも、緑川は「勝てる」と信じている。何故なら、緑川の心を救つてくれた、尊く優しい人が戦つてくれているからだ。

知らない誰かを救済出来たのだ。ならば、大洗だって助けられるは

すだ——スケールも根拠も

理屈もへつたくれもないが、紗希のことを信じなくて何が男だ。

最初はテレビ中継を眺めようと思つたが——まだ緑川は男であつたらしく、戦う方を選んだ。

自室からギターを持ち出し、公園へ力強く歩んでいく。
奏でよう、大洗の勝利の為に。
弾こう、紗希の力になる為に。

夕暮れまで、ひたすらに演奏したのは初めてだつた。

ジャズの中には暗さを表現する曲もあるが、今日はひたすらポジティブなテーマを選曲する。

普段はパツと頭に思い浮かんだ曲を弾くのだが、今日だけは脳内で予約曲をぎつしり詰め込んだ。

演奏している間も紗希を忘れたことはない。観客がいたかどうかすらも定かではなかつた。

別にいい、紗希に届いていればどうでもいい。
曲としては終了させるが、決して演奏を終わらせたりはしなかつた。自分がへこたれていっては

紗希の力になれないと信じ込んでいたからだ。

お前は紗希の大切にでもなつたつもりか、と理性は言つた。

自分は紗希の人柄——違う、紗希が好きで好きでたまらないと本能が叫んだ。

緑川は普通の男子高校生だ。だから、いつも顔を合わせる女の子のことが、自分の音楽を

気に入ってくれた同級生のことが、自分の過ちを聞き入れた上で「好き」と告白してくれた。

丸山紗希に、好意を抱いてしまつた。

だから、ここまで演奏した、出来た。今度は自分が紗希を助けたいから、紗希を守りたいから、紗希に認められたいから。

——最後の曲が終わる。

もつと演奏したかつたが、指がとても痛い。頭を使いすぎて、脳が

ぐらぐら揺れている。

見上げるのすら億劫で、夕暮れか夜かもまるで分からぬ。

演奏時間が最高記録に到達し、改めて心の中で紗希に感謝をする。

また、紗希は自分のことを

手助けしてくれたのだ。

全国大会、終わつたかな——

両目をつむりながら思考すると、控えめな拍手の音が耳に届く。疲れを押して、ゆつくりと前を向く。

緑川の最も見たかつた人が、緑川の最も見たかつた表情をして、緑川の前に居た。

伝わる。

言わなくても、全部聞こえる。

大洗は、もう大丈夫だと。これでライブの練習が出来るねと。

——そして、

「聴こえた」

紗希は、笑つた。

ああ、やつぱり。

この人は、いつも近くに居てくれる。

蒸し暑い夏も、九月が訪れれば途端に落ち着きを覚えていく。

長袖を着るようになつて、何となく芋が恋しくなる季節ともいえるが、学生からすれば、

九月とは文化祭の時期以外に他ならない。

いつもならクラスメートの「出し物を決めてください」の一言で文化祭の到来を察し、

簡単そうな出し物を決めて準備作業に入り、後は劇なり食べ物なりを提供する——それが

普通だつた。

しかし、今年は修羅場が二度も発生したせいで、こうして大洗学園文化祭の地を歩めることに、大野あやは一種の感動すら覚えている。めっちゃ大変だつた。

危うく廃艦にさせられるところだつたが、自分達の力でも現実はどうにかなるものらしい。

改めて、戦車道から逃げないで良かつたと痛感している。

「あー、大洗ライブ会場もよう育つたね」

宇津木優季が「そうだねー、すごいね」と同意する。

大洗学園文化祭は、良くも悪くも「普通の」文化祭だ。だから屋台の数もそれなりであるし、

校内の出し物も決して派手すぎず地味すぎず。

そのスタイルが老若男女問わず、九月の人気イベントと化しているのだが——今年の

ライブ会場は、グラウンドの半分を貸し切るレベルでデカくなつてしまつた。

「……大洗学園文化祭ライブ専用のパンフレットを手渡されたけど、

今年初らしいね、

パンフなんて出たの」

澤梓が、「すごいなー」とパンフレットをゆらゆら揺らしている。

前年通りであればチラシ一枚で情報が整理されるほどの規模だつ

たのだが、今年は参加者が

大幅に増加したせいで、やむを得ずパンフレット化したらしい。

「他校からの参加者が続出したんでしょう？ 公式ページで見たみた。

そら予算も降りるよねー」

あやが興味深くパンフレットをめくると、まずは大洗学園所属のバンドメンバーが

掲載されている。それは前年通りだし、大洗の世界の必然ともいえる。

——ここで一つ、あやは「あ!?」と声を出すに値する情報を目の当たりにする。他の友人も「は!?」だの「おお!?」だの「ええ!」だと同時に騒ぐ、文化祭でなければ周囲から注目されていた。

「、これ……なんで、紗希が……!?」

眼鏡が壊れたかと思ったが、参加者の中には丸山紗希の写真が掲載されていた。

カメラ目線じゃないあたり、間違いなく本物の紗希だ。

「し、しかもこれ……男!?

名前は緑川で、性別は男。使用する楽器はギターで、ジャンルはジャズ。

どうやつて緑川という男と知り合ったのか、どういう話の流れでバンドを組んだりしたのか、この緑川という同級生は何者なんだ。

疑問が一つまた一つと増えていく中、丸山紗希の詳細欄を見て「は？」とあやは声を出す。

丸山紗希 ボーカル。

あや以外も同じところで反応したらしく、「嘘でしょ！」と大声を出す。

だが、広報担当の河嶋桃がミスをしていなければ、この情報はマジで正しいということになる。

——先ほどまで紗希と一緒に居たはずだが、もう何処にもいない。たぶん、ライブに参加する為に準備をしているのだろう。

「……なんかさ」

他校の生徒——あの制服はサンダースか——とすれ違う。

坂口桂利奈が、この時点でもう疲れていそうな表情をしながら、

「今年、やばくない?」

一同は、同時に頷いた。

ライブが始まり、「サンダース大学付属高校」の「アリサ」が、「今日は集まってくれて

ありがとー!」とマイク片手に大声を出している。

同時に軽快な音楽が流れ、サンダースらしいハイテンションな歌詞が大洗学園全体をあつという間に飲み込むわけだが――

何も別に、乗つ取られたとか乱入されたとか、そういうワケではない。単に、大洗学園文化祭

ライブの参加条件に「廃艦免除記念! 他の学園からのエントリー大歓迎!」の一文が

ノリで加えられ、それに乗つて、他の学園がこぞつて参加申請メーレをぶつ放してきた

結果に過ぎない。

それがチラシからパンフレットへランクアップした原因であり、ページをめくれば、

見知った他校の生徒の顔ばっかりが掲載されている理由付けとなっている。

ただ、どうして戦車道履修者が数多く参加してきたのか――たぶん、大洗を救つたテンションが未だに冷めきれていないせいだろう。他校とかそんなものは関係無く、力を結束させて何か一つの悲劇を潰す――学生からすれば、これほど血沸き肉躍るシチュエーションはもう無い。

その再現をしよう、また騒ぎを起こしてやろう。そんな勢いのままで、「よし出るか!」と他校もノリで決めたに違いない。

――これほどの数を編集するのには相当の時間と体力が必要だつたらしく、ページの隅つこには「疲れた(河嶋桃)」のコメントつき。

「いやあ……歌うまいね」

屋台で販売されていたクレープをかじりながら、梓はアリサの歌手つぶりを羨ましそうに眺めている。

文化祭の準備中に「大洗のライブに、他校がたくさん攻めてくるらしいよ！」との噂は

聞いていたが、文化祭の公式ページでもでかでかと掲載されていたので、一応知つてはいるつもりだった。

しかしこうして目の当たりにすると、何だか現実感が無いし、これはこれで面白いなあと

あやは思う。

「次は、プラウダ高校の民謡を聞かせてあげるわッ！」

パンフレットによると、歌手はニーナというプラウダ高校戦車隊の一員らしい。リーダーであるカチューシャは、あくまで楽器を奏でてニーナを引き立たせている。

——ページをめくっていくと、ほとんどの戦車隊隊長は楽器を演奏し、その他の隊員に

歌手という主役を譲っているケースが多い。

たぶん、一種の「粹な計らい」という奴なのだろう。實際、ニーナは心を込めて、情熱的に、

すこぶる楽しそうにプラウダの文化を訴えていた。

「来年、参加してみようかな……」

山郷あゆみが、ぽつりと呟く。

あやも、同意するように「いいねー、いいんじやないかな」と返すのだった。

「聞いてください！ 黒森峰女学園渾身のジャーマンメタルをツ！」

いえ——いツ！

すっかり他校生を受け入れた大洗学園の生徒達が、駆け付けた他校

生が、来客が、拳を

振り上げて絶叫する。

攻撃的で、それでいて存在感抜群の音楽は、男どものみならず、女子もジャンプしたりして盛り上がっている。

パンツアージャケットを着こんだ西住まほが、ドラムを叩いている時点でポイントが高いし、

逸見エリカという有名選手がギターを弾いているのもこれまた強烈だ。

長い髪を舞わせ、怒っているような真剣であるような表情をしたエリカに、ギターはあまりにハマり過ぎていると思う。

歌手は赤星小梅で、パンフの写真を見ると温厚そうな顔をしている。しかし今の赤星は一生懸命に、怒るように歌詞を叫んでいた。決して、生半可な気分で他校のライブへ参加したわけではないのが伝わってくる。

まほはステイックをペン回しの要領で回転させ、金属板のようなネックレスをぎらりと光らせていた。

アンツイオ高校が歌い、聖グロリアーナ女学院が演奏し、継続高校が音を流して、パンフに掲載されている参加者達が出番を終わらせていく。それでも明日の部が存在するあたり、参加者の数が半端では無いことを物語つていた。

大洗のバンドメンバーは勿論、他校の音楽もレベルが高かつたのだが、その中でひと際

沸いたのがビゲン高校の「校歌」だった。

最初はビゲン高校の校歌らしきものが斉唱されたのだが、数秒後にメンバー達がギターを

装備し、大洗、サンダース、プラウダ、聖グロリアーナ女学院などの校歌メタルアレンジを

メドレーで叫び出したのである。パンフには「認定済み」と書かれてあつた。

パートに該当する生徒達は、メタル校歌に呼応するように叫ぶ。それにつられて、血を

騒がせたい連中も無意味に回転したりジャンプしたり。

「ビゲン高校か……覚えておかないと」

あやが、感心したように頷く。桂利奈はすっかりハイになつて叫ぶわ踊るわだし、梓もヘッド

バンキングを隠せていない。あゆみも一緒になつて校歌斎唱をしていて、やっぱり戦車道履修者は派手なことが嫌いじゃないのだと実感した。

ビゲン高校の校歌で好き勝手に盛り上がった後は——紗希と緑川の、二人きりの演奏が始まる。

この人数では派手なことは出来ないだろうし、あのビゲン高校の後では少しプレッシャーがかかるかもしれない。それほどまで、ビゲン高校はメタルだった。

それでも、紗希は入場してきた。緑川らしい男も、ギターを抱えて大勢の前に立ち、やがて椅子に座る。

あやが、桂里奈が、あゆみが、優季が、紗希と緑川を注目する。それまで喧騒に飲まっていた観客も、一呼吸つけて静かに次の演奏を待つっている。

——緑川が、ギターの弦を指で鳴らす。前奏が会場を震わせる。

あやが知っている「ジャズらしい」音が、透き通るように耳に入つていく。決して明るすぎず、しかし情熱的に、音楽を観客へ届けるのがわかる。

そして、紗希がマイクを握りしめる。すうつ、と呼吸したのが何となく聞こえる。あやの拳が強く握られる。

「」

今まで聴いたこともない、紗希の歌声が、歌声のみが、世界の音を独り占めにした。

喋ることが出来ない。今、この場で何かを言おうものなら、それは過ち以外に他ならない。

あやは、紗希の歌を聞き逃さないように、身も心も紗希へ委ねることにした。

紗希の透明な声は、誘われるようにしてあやの耳へ入つていく。そ

して、紗希の声を活かして

いる緑川の演奏が、心に滲んでいく。

紗希と緑川が手を合わせて音を作っているからこそ、観客全員がジヤズを受け入れているのだと思う。ここに居て良かつたと、心から喜べるのだと思う。

ああ、紗希——

あんた、いい人と会つたんだね。

いつの間にか、演奏は終わっていた。

本当に、あつという間だつた。これで終わってしまうのかと、紗希と緑川の世界は閉じてしまうのかと、あやは息をつく。

蝶が羽ばたいているような、穏やかな紗希の歌もこれでおしまい。紗希と緑川は頭を下げる。

——あやが、たまらず拍手を送る。それをきっかけに、友人達も嬉しそうに手を叩き始める。

やがて会場全体に、決して騒がしくはない拍手の音が咲いていく。

そのまま去つていく紗希と

緑川の後ろ姿を見て、あやは、

「……いいコンビじゃん」

そう、まとめるのだった。

やることをやり終え、極度の緊張状態から解放された後は、紗希と一緒に屋台で食い放題するに決まつていた。

そのはずだつたのだが、

「君、緑川君だよね？　いやー、さつきの演奏綺麗だつたよーー！」

「いいなーいいなー、紗希つたらいつのまに男を見つけてたのーー！」

「歌すごかつたよ！　紗希は何でもできるね！」

「紗希、サイコーだつた！　あ、緑川君もかつこよかつたよ！」

「こら、こらみんな……あ、初めまして、澤梓といいます」

いきなり女の子五人に囲まれ、決して異性慣れしていない緑川は

「ええ……？」と目を

回していた。

「も、もしかして、丸山さんのお友達、かな？」

「そだよ、友達友達」

ショートヘアの女の子が、えへんと腰に手を当てる。次に、紗希の友達らしい五人の女の子が、それぞれの名前をフルネームで自己紹介してくれた。

「なるほどねー、いきなり英語の勉強を教えてくれって伝えてくるから……そういう……」

うんうんと、あゆみが納得するように頷く。

セリフから察するに、紗希は友達から英語を教えて貰つていたらしい。しかも、自作の曲を

歌えるようにする為に。

「それでそれで、一人はどんな関係なんですか？ やっぱり……彼氏彼女!?」

優季は、この場で一番切り込んだ質問をぶち込んできた。

あやも、「それ気になる！」と目をぎらつかせている。

「ち、違うよ……単に、バンドメンバーってだけ。そういう仲じやないから」

そこで、梓が「へえ」の一言とともに能面と化す。

緑川は、「な、何？」と臆する。

「紗希の顔、見てくださいな」

隣に突つ立つている紗希の横顔を見てみれば、

紗希は、緑川の顔をじいつと見つめていた。眉をハの字にへこませながら。

「え、ま、丸山さん……」

「紗希は、緑川君のことをただのバンドメンバーとは思つていないみたいですよ」

あゆみが、口元をへの字に曲げながら指摘する。

——これまでの、紗希に対する認識といえば、バンドメンバーとかリピーターとか、好意的に見れば友達と考えていた。

紗希のことは生涯で一番好きな女の子であるし、チャンスがあれば交際したいとも考えていた。だが、「無理だろうな」と、分かったフリ

をしているところもあつて、このままバンドメンバー

として付き合つていくのが良いのかもしない、とも思つていた。

「あ、えーっと、その……」

感情が喜びと恐怖で踊る、脳の鼓動が顔に伝わつてくる。紗希の友達から視線の集中砲火を

受け、緑川はどうしようもなく唸り、

「ま……紗希さんは、僕の大切な人です。その、僕にとつて必要な人ですかからつ、信用して

ください」

よく分からぬことをよくもまあ言えたものだと思う。

しかし紗希は、満足したようにくすりと笑う。友達にも紗希の意図が伝わつたのか、安心した

ようすに梓も息をつき、

「あ……ごめんなさい。私も、いきなりあんな質問を」

「あ、いやいや、こっちもごめんね。曖昧なことを言つてしまつて」謝罪する優季に対し、緑川も小さく頭を下げる。高校生が異性同士で肩を並べて歩いていれば、それは同じ高校生から見れば「付き合つているのか?」の一つや二つは吹っ掛けたくなるだろう。

「あ、そだ。緑川君と紗希は、これから屋台巡りでもするの?」

桂利奈の質問に対し、紗希がこくりと頷く。

「じゃあ、邪魔はできないねー。ざんねんざんねん」

歯を見せながら、豪快に笑う。緑川は、何だか恥ずかしくなつてうつむいてしまう。

「こら、そういうことを言つちや……あ、そうだ」

梓が、携帯を操作する。

「紗希に好かれているということは、あなたは信用出来そうですね? メールアドレスの交換でも

あやが、「お、いいねー」と同意する。他のメンバーも異論は無いらしく、様々な携帯を

バババツと差し出された。

「え、えと、いいの……?」

梓が、「はい」と頷き、

「紗希と一緒に、演奏した人ですから」

やつぱり、紗希はみんなから「居て欲しい人」と思われているのだろう。

決して他人を否定しないからこそ、誰からも受け入れられる。一生真似出来そうにない。

「ありがとう……嬉しいよ、うん」

久々に連絡先が増え、緑川は実に満たされた表情で携帯を操作する。

「さつきの演奏、凄く良かつたですよー。楽器を演奏出来る人か……いいかも」

緑川の目が、優季の笑みにくぎ付けとなる。

女の子の笑顔のみならず、楽器が弾ける男が良いと言われば、やつぱり思春期男子である緑川の表情などあっさりと崩れてしまう。

——その時、腕にちくりとした痛みが生じる。一体何事かと右を向いてみれば、緑川の腕を

つねり、頬を膨らませ、不服そうに眉をしかめている紗希が居た。
「あ……ち、違うんだよ！ 僕は紗希さんが、紗希さんが……」

「ふけつー」

あゆみが、軽蔑するような目つきで緑川を評している。

緑川は「許して！」と叫び、紗希に食事を奢ることを提案した。紗

希の友達から、

「頑張ってねー」と見送られつつ。

——誠意が伝わったのか、紗希は嬉しそうな顔で焼きうどんをすすっている。なんやかんやで、今日一日はずつと付き合つてくれた。

——
次の日になつても、ライブ会場は音楽が鳴りやまない。

緑川は紗希と隣同士で座りながら、大洗学園生徒のラップを耳にしている。紗希とは

いつの間にか合流していて、あゆみからのメールによれば「紗希がふつといなくなつていました。ということは、あなたのところへ行つ

たんですね。いい話、期待しています」とのことだ。

困るなあと思いながら、緑川は紗希と文化祭に浸っていた。ラップがよく聞こえる、紗希も

どこか遠い表情でバンドメンバーを眺めている。

——演奏が終わり、緑川と紗希含め、観客から盛大な拍手が沸いた。ああ、悪くない。

しばらくして席を立つ。紗希と一緒に屋台で飲み食いしたり、校内で絵や歴史を見て回つたり。特に目立つたやり取りはしなかつたが、紗希は決して緑川から離れようとはしなかつた。

緑川も、意図が読めない紗希の表情を目にするたびに、紗希と一緒にいられて良かつたと実感するのだ。

紗希のことは好きだが、このままの関係も悪くはないと考えていた。他でもない恋愛関係として結ばれるのは大歓迎だが、紗希を受け止められるだけの器があるのだろうかと、ジャズ以外に何か楽しませられる武器があるのかと。

はつきりしない。

困つたものだと、緑川は頭に手を置く。紗希がそれを見て首をかしげるが、「なんでもないよ」と苦笑し、

廊下のど真ん中で、真正面から、緑川の旧友グループとばつたり会つた。

クラス替えでしばらく顔を合わせていなかつたが、未だに大洗学園の世界から抜け出せていない以上、こうした場面は想定するべきだった。

旧友も緑川のことは忘れてはいなかつたのか、旧友も気まずそうに表情を歪ませる。

——ライブで演奏した以上に、頭が熱くなる。良い言葉を引き出そくにも、喉に引っ掛けたてそれきりだ。

紗希の前では間違いを認めたくせに、肝心の本人の前では何も出来ないのか。正しい言葉を口にすれば、お前はまたより善くなれるんだ

ぞ。

それでもあの日以来、「お前と話していると疲れる」という言葉を突き付けられてから、自分は誰かと話すと、その誰かに対し「無条件で」迷惑をかけてしまうのではと、思い込むようになっていた。

そんなはずはないのに。昨日だつて紗希の友達と話せていたくせに。

過ちを犯したのなら、それを認めて正せば良いだけなのに。

一人で勝手に思考の泥沼へ片足を突っ込んでいる中、右手に熱がこもつた。

はつと視線を向ける。

紗希が、緑川の手を力強く握っていた。

瞬間、緑川の不安は空高く飛んでいく。

仲直りできるよと、紗希の意志が目から伝わってくる。

紗希は何も言葉にしていない。

それでも緑川には分かる。紗希とはもう友達であり、近くに居て欲しい人だから。

「……あの」

旧友が、黙つて聞く。

「その、あのさ……前は本当に、自分のことばっかり話してごめん、本当にごめん。信じて

もらえないかもしねいけれど、これからは、人の話を聞いて、もつとその人のことを知ろうつて決めたんだ。一方的に熱くなつてもダメだつて、お前に教えられた」

言葉が溢れてくる。

「だから、僕も生き方を変えてみたつもり。そのお陰で、昨日は紗希さんと一緒に演奏出来たんだ」

断言する。

「僕の方から逃げ出してあれだし、許さなくともいい。けど、謝らせて欲しい。本当にごめん!」

頭を下げる。通りすがる生徒もいたが、何も恥ずかしくはない。やるべきことをしたから、何の迷いも無い。どんな結果であれ、悔いは抱かない。

今はもう、一人ぼっちじゃないから。

「なあ

旧友が声をかける。頭は下げたままだ。

「顔、上げてくれよ」

恐ろしかったが、それを顔に出さないように。緑川と旧友の目が合う。

「お前さ……本当にジャズが好きなんだな」

緑川が頷く。

「演奏見てたけど、すげえ格好良かつた。しかも女の子のボーカルなんて、やるじやないかこの」

からかうように、旧友が笑う。連れも、「だよなー」とふざけるように同意していた。

「俺も、その、突き放すようなことを言つて悪かつた。けれど、こうして謝ってくれたことが本当に嬉しい。——すぐは無理かもしれないけど、前みたく、絡まないか？」

緑川から言葉が出てこない。

「また、お前の演奏を見せてくれよ」

緑川から、無言の笑みがこぼれる。

自分の感情を伝える為に、紗希へ視界を向ける。紗希は手をつないだまま、満面の笑みで緑川を迎えてくれていた。

少し暗くなつたところで、大洗学園文化祭は止まらない。廃艦免除のテンションも

あつて、突如として屋台の安売りセールが勃発し、ライブ会場も変わらずどんどんちやん騒ぎを

繰り広げている。もはや戦場だった。

その一方で、緑川と紗希は公園のベンチに腰かけていた——ギターを持参して。

今は、人気など見る影もない。観客は大洗学園文化祭にとられているだろう。

ここまで離れると、ライブ会場の熱気はもう届かない。公園を照らす街灯がぼんやりと目に入り、冷えた空気が肌に絡みつく。

見上げる。

少しの星が瞬いているだけで、それ以外のものは何も見えない。本当に何もない。

それでも、緑川はこの世界が好きになっていた。落ちつきのない文化祭も、自己主張が激しい

ライブ会場も、寂しい星空も、静かな公園も、どこも歩んでいきたい場所だと思っていた。

ちらりと、紗希を眺める。紗希には何が見えているのか、無表情のままで斜め上をじいっと

眺めている——しかし緑川が目を合わせれば、紗希も呼応するよう

に緑川を見つめ、にこりと笑うのだ。

何度も見た紗希の顔なのに、恥ずかしくなる。

今公園には逃げ場がない。遊具で遊ぶ子供も、それを見守る母も、ジヤズが好きそうなオヤジもない。

何か、話したかった。何か、気の利いた一言でも口にしたかった。何か、ロマンチックな台詞を思いついたかった。

どうしようかなあと悩んでいても、紗希は緑川を待つてくれる。拒絶することを拒むような笑みで。

「……紗希さん」

紗希が、うん、と頷く。

「僕がちゃんと謝れたのも、憧れのライブが出来たのも、全部、紗希さんのお陰だよ。

僕一人じゃあ何もできなかつた、ここで演奏ばっかりしてた」

紗希は、緑川の言葉を受け止めている。

「本当にありがとう。僕は、紗希さんと出会えて本当に良かった。

……これからも、紗希さんと

たくさんお話がしたい、演奏を聴かせたい」

紗希は、はつきりと首を縦に振った。

「……たぶんね、少しずつだけど、友人と会話することが多くなると思う。週末、どこかへ遊びに行くかもしれない」

ギターの弦を撫でる。

「でも、放課後の付き合いはあんまりしないと思う」

紗希が、「？」と首をかしげる。

「やつぱりね、放課後の時間はここで演奏してみたいんだ。そのお陰で、君とも会えたからね」

うん、と小さく頷く。

一番言いたいことを言えた。

「そういえば——僕と初めてここで出会った時は、何か公園に用事でもあったのかな？」

紗希が携帯を操作し、戦車の画像をぐいっと見せる。試合結果か、練習の成果か、

戦車は傷だらけだつた。

「ああ、気分転換か。だよね、大変そうだもんね」

苦笑する。決して楽な道ではなくとも、何かを救い出せる立派な文化であることは分かつていてるつもりだ。

「僕の演奏が紗希さんを癒せるのなら、こんなに嬉しいことはないよ」音を鳴らす。紗希は、うん、と頷いた。

冷たい風が吹き、少しだけ間が開く。それは言葉を失つたのではなく、自分の全てを紗希に

捧げる為に、ほんの少し勇気を燃え上がらせているだけだ。

——気持ちが熱くなつていく。紗希が自分と手を繋ぎ、心を守つてくれた時から。

「……それで、ね。僕はこれからもずっと、放課後はここにいる、演奏してゐる」

愛おしいという、どうしようもなさが溢れていく。

「君と会いたいから」

心の底から、何もかもを伝えたい。

「僕は、君が好きだから、愛してるから。だから、放課後はここへ来て、君に音楽を届けたい」

紗希と一緒に生きていきたい。

「友達は大事だ、それは思う。——けれど、一番大切な人は、紗希さんだから」

音だけが届いても、愛が拒まれても、緑川は紗希のことをずっと想つていくと誓う。

紗希がいなければ、今、ここに座っていたかも分からぬ。文化祭なんて消えてしまえと、

滅んでしまえとすら考えていただろう。

紗希は自分の全てを救ってくれた。それだけで十分だつた。

「ごめんね、こんなことをいきなり言っちゃ、」

緑川の言い訳は、紗希の唇に触れたことで泡となつて消えた。何よりも近かつた紗希の顔が、すつと離れていく。その目は緑川の顔を映していて、緑川の為に口元が笑つていて。

——緑川は、ギターを持つ。演奏するのは勿論、自作の曲。

言葉が見つからなくとも、想つていれば、拒まなければ、その人とその人はいつか求めあう——紗希が歌詞を考えてくれた、緑川と紗希の曲をこれから演奏する。

紗希に対する愛の言葉が思いつかないけれど、この曲が、緑川に伝う涙が、紗希に想いを届けてくれるだろう。

紗希は緑川に寄り添い、いつものように空を眺める。そして、世界に向けて唄うのだ。

——だいすき。